

学部教育の目標

理学部物性学科 ◆ 西川 恭治



理学部玄関で竹山元学長(左)と

はじめに

開かれた学問ということまで書かれたものを見ると、そのほとんどが研究に関することである。大学が、研究とそれをもとにした教育の場である以上、これは当然のことである。

しかし、大学がその学問を社会に開いているという点で最も影響力が大きいのは、学生の受入れと卒業である。卒業生が社会で活躍している姿を考えれば、これは明らかなことであろう。この学生の受入れから卒業に至る大学教育の目標について、この一年間、自然科学・技術系大学院重点化構想を検討してきた過程で、私自身いろいろ考えてきたことを、ここで述べさせていただくことにする。

入試より、教育を

学生の受入れは入試に始まるが、今さら入試のあり方について兎や角言うつもりはない。近年のように、十八歳人口の半数以上が大学入試に挑んでいる段階で、大学だけが入試にどんなに工夫してみても、自ずと限界があると

思うからである。

むしろ大切なことは、入学してくる学生に対してどういう姿勢で教育をするか、ということである。言い換えれば、学生を大学に受け入れてから卒業させるまでの間に、学生にどのような「付加価値」を与えて再び社会に送り出そうとしているか、である。

学生の質の変化

今、なぜこんなことを問題にするかという点、そこには少なくとも三つの大きな要因があると考えるからである。

第一は、高等教育のマス化である。一昔前までは、大学は少数のエリートを受け入れて、彼らを社会のリーダーとなるようエリート教育をしていけばよかった。自然科学分野で言えば、研究後継者とその周辺の人材養成である。

しかし昨今は、本学でも、学問への情熱がほとんどないまま入学してくる者がかなりな割合を占めるようになってきている。そして、そういう学生たちの教育を無視しては、大学における学部教育は成り立たなくなってきたというのがある。私自身の教育体験による実感である。そもそも、大学というところが、そういう学生たちを受け入れ

れ、教育する場に変貌してきているのだと思うのである。

第二は、学生の生育環境の変化である。具体的には、生活環境の中での情報化・ハイテク化の著しい普及に伴い、学生たちは、ボタン操作で何でも動かし、また動かされる習慣に慣らされ、物の仕組みや自分自身についてじっくり考えるゆとりがないままに生育してきている。子供たちの「理科離れ」が、その影響の現われ方の一つと思われる。

そして第三に、今年度から始まった高等学校の新教育課程の影響である。これはむしろ、子供たちの理科離れ対策として、知識提供型から、子供たちが自ら考え、理解する喜びを授ける方向へと教育の大転換を図ったものであるが、現在の高校教育の体制下では、そう簡単にその成果が生まれるとは考えにくい。この点についての具体的な対策は、もう少し新教育課程の成り行きを見守ってからにした方が良いと思われる。

課題把握能力の育成

このような背景と本学の現状を考慮すると、本学における学部教育においては、まず学生たちに学問を学ぶことの喜びを与えることから始めなければならぬと思われる。

本学の場合、志願してくる学生たちの多くは、素朴で未熟ながらも何らかの課題意識を持って学部を選んできているのが現状である。

学ぶ意欲、喜びを授けるためには、まず、学生たちが持っているこの課題

意識を大切にすることから出発して教育に取り組むのが、最も自然だと思ふのである。つまり、学生の持つ課題意識に沿って、それを正しく把握するための学問的アプローチを与えることを、我々の学部教育の役割と位置付けるのが適当ではないかと考える。

そして、そのような課題把握能力の育成には、本学教官のように、学問・研究の最先端で活躍し、自ら創造と発見の喜びを体験している研究者が直接学生たちに接し、教育に当ることができると思うのである。

大学院教育へのつながり

もとより、本学に学ぶ学生の中には、将来学問で身を立とうと望んでいる学生が多数いることも事実である。そういう学生たちには、大学院への進学を勧め、大学院で直接研究に触れながら専門的な学問体系を学ばせることによって、課題解決能力、さらには課題発掘能力を身につけさせるのが良いと考える。

このような一貫した教育を実施するためには、大学院の整備充実(重点化を含む)が、焦眉の課題であることは言うまでもない。(にしかわ・きょうじ)

プロフィール

◆ 専門はプラズマ物理学(理論)

◆ 理学部長(本年三月まで)、大学院委員会自然科学系研究科再編専門委員長

◆ かるた六段、全日本かるた協会理事、広島県かるた協会会長